

〈資 料〉

ロシア・ソビエトの刑事法学者(1)

上 野 達 彦

1. はじめに

人間は、それぞれ固有の人格をもっている。人格は、その人の思考基盤や「生き方」に関連し、またその社会的・経済的、精神的活動に大きな影響を与える。例えば、その人が法律学者であった場合には、このことに加えて彼らには特別な使命と役割も求められる。かつて刑法学者・宮内裕は、この点について、三つの側面を述べていた⁽¹⁾。その三つの側面とは、法律学者は、第一に、法解釈学者として、自らの学説を通して、実務的法律家（裁判官・検察官・弁護士）の法的実践活動と連携することであり、第二に、法律家として、立法機関や政府などの立法活動に影響を及ぼすことであり、第三に、法律家として、国民の法的意識を高揚させ、高いレベルの法教育の実践を行うことである。このような意味で、法律学者がどのような人格を持ち、どのような役割を果たしてきたかを解明することは、法の理論的な担い手たる人物に迫ることとなる。従って、木田純一（刑法学者）が、かつて述べたように、「理論と人とは密着しているので、その人の理論にたいする批判は、その人に対しても及ぶ」⁽²⁾ことにもなる。

これまで、私はロシア・ソビエトの刑事法を研究対象としてきた。その研究生活の過程において、私は現実には、また文献上出会った刑法学者の人物像を解明することによって、彼らが生きてきたそれぞれの体制のなかで法律学者としての使命と役割をどのように演じてきたかを意識してきた。

しかしながら、この作業は容易ではない。まず帝政ロシア時代における刑法学者の業績は、ソビエト時代にほとんど顧みられなかったところから、資料の決定的な不足がある。またソビエト時代の刑法学者個人としての業績も、極めて限定されたものであった。

このような状況を改善する方向が、ソビエト連邦からロシア連邦へと体制転換するなかで、部分的に刑法学者（法律学者を含む）の回顧録⁽³⁾、著作集⁽⁴⁾、履歴・業績⁽⁵⁾が公表されてきたことによって現れてきた。このことは、ロシアの刑法学者（法律学者を含む）の人物像についての研究基盤が、次第に好転する兆しが生まれてきたことを意味している。

本稿は、ロシアという地域や政治・社会体制の風土のなかで、刑法学がどのように生成し、刑法学者がこの学問とどのように格闘してきたかという「刑法学者と学問」との関わりを解明するための準備作業であり、同時にロシア・ソビエトにおける刑法学者の群像に迫るためのデータベース作成のための作業である。さしあたり、以下のような27人からなる著名なロシア・ソビエトの刑法学者の履歴と業績を中心にして、帝政ロシア期、ソビエト前期、ソビエト後期から現代ロシア期に分けて紹介する⁽⁶⁾。なお、その際に、基本的には、ズビャギンツ

エフ、オルロフ著『ロシアの法律家たち』（2004年）⁽¹⁾からそれぞれの人物について概説し、本書に掲載されていない場合には、その都度参照した文献を掲げる。

Н.А.Неклюдов(1840-1886)

Н.С.Таганцев(1843.3.3-1923.3.21) *

А.Ф.Кони(1844.1.29-1927.9.17) *

Д.А.Дриль(1846-1910)

И.Я.Фойницкий(1847.9.10-1913) *

А.А.Пионтковский(1862-1915)

В.В.Есипов(1867-1912.12.21) *

М.Н.Гернет(1874.7.12-1953.1.16) *

Н.Н. Полянский(1876-1961) *

Д.И.Курский(1874.10.22-1932.12.20) *

М.М. Исаев(1880-1949) *

А.Я.Вышинский(1883.12.10-1954.11.22) *

А.Н. Трайнин(1883-1957)

Н.В.Крыленко(1885.5.14-1938.7.29) *

Б.С. Утевский(1887-1970.6.7) *

М.С.Строгович(1894-1984.2.13) *

А.А. Пионтковский(1898-1973)

А.А. Герцензон(1902-1970) *

М.Д. Шаргородский(1902-1973)

В.М.Чхиквадзе(1912.1.1-) *

Г.З.Анашкин(1921-1987.9.21) *

И.И.Карпец(1921.6.19-1993.5.24) *

В.Н. Кудрявцев(1923.4.10-) *

А.М. Яковлев(1927.8.30-)

Н.Ф.Кузнецова(1927.12-)

С.Г.Келина(1928.12.29-)

В.В.Лунеев(1932.2.16-) *

（以上の刑法学者名に*印の付いている人物については、ズビャギンツエフ、オルロフ著『ロシアの法律家たち』（А.Г.Звягинцев, Ю.Г.Орлов, Российские юристы.2004）が出典であり、それぞれの文末の数字はその頁である。）

(1) 長谷川・宮内・渡辺編「新法学講座」第二巻『日本の法律家』（1962年・三一書房）11頁

参照。

- (2) 木田純一『戦後日本の刑法学』（1972年・一粒社）「はしがき」
- (3) 例えば、カルペッツ『法律家の思索』（И.И.Карпец.Дело, которому мы служим.「размышления юриста」1989）、トライニン「モスクワ大学についての回想」（А.Н.Траинин.Воспоминания о московском университете.Вестн.моск.ун-та.сер.11.право.1991.2.3.4.5.）など。
- (4) 近年では、クドリャフツェフ『社会科学に関する選集』3巻（В.Н.Кудрявцев.Избранные труды по социальным наукам.в трех томах.2002.）、クズネツォーフ『著作選集』（Н.Ф.Кузнецова.Избранные труды.2003）などがある。
- (5) クズネツォーフ「アロン ナウモビッチ トライニン（1883-1957）」（Н.Ф.Кузнецова.Арон Наумович Траинин(1883-1957).Правоведение.1976.5）、シシヨフ「アンドレイ アンデレービチ ピオントコフスキー（1898-1973）」（О.Ф.Шишов.Андрей Андреевич Пионтковский(1898-1973) Правоведение.1977.2）など。
- (6) 時期区分として、それぞれの刑法学者が活躍した時期について、主に帝政ロシア期、ソビエト・ロシアにおける第一世代、第二世代および現代ロシア期として区分した。
- (7) ズビャギンツェフ、オルロフ著『ロシアの法律家たち』（А.Г.Звягинцев, Ю.Г.Орлов Российские юристы.2004）

本書の「序文」のなかで、著者はその意義を次のように述べている。

「法と法律は、全生活一人の誕生から、また市民として戸籍に登録された時から人間に付随している。人類にとって文化の一部である法は、国家とともに発生した。国家意思は、法律という形式で現れた。」

「ソビエト時代に法律学はすべての大学、専門の法律学研究所（モスクワ、ハリコフ、スベルドロフスク、サラトフ）、さらに各省庁のいくつかの高等教育機関で幅広く教えられた。国家と法の基礎は、ほとんどすべての高等中等専門学校、小学校において対象とされた。現代において、法学教育はさらに幅広いスケールを得ている。

本書では、われわれは最も有名な法律家を紹介している。これらのうちのある者は、法学教育を受け、国家権力機関や施設で高い地位を得、大臣、枢密院議員、代議員であった。別の者は、専門教育を受けずに、いろいろな法律施設、例えば裁判所、検察機関や司法機関を指導し、実務で法律問題の専門家となった。

ロシアでは、つねに優れた学者に栄誉を与えてきた。」

2. 帝政ロシアにおける刑法学者

ネクリュドフ（Н.А. Неклюдов (1840-1896)）

人類学派的傾向をもった、ペテルブルグ軍事—法律アカデミーの刑法教授であった。

ネクリュドフは、すでにロンブローゾの「犯罪人」という本が出版される11年前に、『刑

事統計評論』（1866年）という著作のなかで、犯罪の基本的原因として、人間の年齢のような生物学的事実を検討していた¹⁸⁾。

・*人類学派的傾向をもった、帝政ロシア期における法律家として、ドリリイ、ネクリュドフ、リハチフ、医師として、タルノフスキー、チジュが知られている。

タガンツエフ（Н.С. Таганцев(1843.3.3-1923.3.21)）

「有名な学者—法律家。1843年3月3日、ペンザで生まれる。聖職階級の出身。ペンザのギムナジウムで学び、ペテルブルグ大学法学部で勉強を続けた（1862年に卒業）。優れた才能によって、教授たちの注目を集めた。大学卒業後、刑法講座の『教授資格準備のために』外国に派遣された。ベルリン（ヘネスト、ベルネル、ギリツェンドルフのところ）で、ライプツヒ（アレンスのところ）で講義を受けた。ハイデルブルグでは、著名な学者・ミッテルマイヤーの指導のもとで研究した。タガンツエフは、ロシアに帰国後、この学者に対し謝辞を捧げた。1867年に、『再犯について』というテーマで修士論文の公開審査を受けた。1868年からペテルブルグ大学で公務員志望学生向けの刑法講義を行い、法学部生に刑法講義を行った。この時から、彼の献身的な研究および文献的活動が始まった。タガンツエフは、中等専門学校（1905年まで）で、アレクサンドル貴族学校（1882年まで）で刑法の講義を行い、その上彼は法律百科事典も指導した。1870年に、『ロシア法における生命に対する犯罪について』というテーマで博士論文の公開審査を受けた。講義や研究活動と並んで、刑事手続きの問題についての法的文書、監獄法令などの策定に携わった。1871年に正教授となった。1873-1878年には、「民法および刑法雑誌」の編集に携わり、そこでは法律学分野における深い研究が発表された。一般の定期刊行物、例えば新聞「声」、「秩序」などにも発表した。1876年には、ペテルブルグ大学法学部長に選任された。

1881年には、司法省の有識者会議メンバー、さらに新刑法典草案策定委員会（議長：フリシ）メンバーに選任された。これに関連して、ペテルブルグ大学やアレクサンドル貴族学校で教えることを辞めた。刑法典草案についてのほぼ200ページにおよぶ説明書が直接タガンツエフによって書かれた。1883年に、彼は内務省の犯罪の防止と阻止についての省令を改正するための委員会に司法省の代表として参加した。すべてこれらの責務は、彼が基本的な仕事「ロシア刑法講義」（全2巻、1869-1870年、その後数版を重ねた）、「刑事および矯正の刑罰法典」（1873年、14版を重ねた）および「仲裁裁判所で裁定された刑罰についての規則」（1876年、17版を重ねた）の膨大なコンメンタールを書くことを妨げるものではなかった。

1887年から元老院議員、1896年から元老院刑事控訴院長になった。1903年1月には、1等文官の官等を受けた。1905年4月に皇帝は彼を国家評議会員に選任した。ヴィッテは、その総理大臣職において、彼を文部大臣ポストに推挙したが、タガンツエフはそのような選任を固持した。

多年にわたって、サンクト・ペテルブルグ大学での法学会刑事部門の議長であった。1915-1917年には、ロシア刑事法学会の名誉議長であった。ペテルブルグとビシネム・ボロチクの名誉仲裁裁判官となった。理事長であった文芸財団の職務に積極的に参加した。1917年の2月革命後、ペテルブルグに住んだ。彼の息子、地理学教授B.H.タガンツエフは、1921年に反ソビエト集団を指導した容疑で処刑された。

以下のような勲章が授与された。第1等スタニスラフ勲章(1882年)、第1等アンナ勲章(1884年)、アレクサンドル・ネフスキー勲章(1899年)およびこれに対するダイヤモンド製記章(1913年)など。1917年12月には、ロシア科学アカデミー名誉会員に選ばれた。

1923年3月21日死去」(442-444頁)。

*近年、ソ連崩壊後のロシアでタガンツエフの著作の復刻が相次いでいる。例えば、彼の代表的刑法教科書の復刻・Н.С. Таганцев, Русское уголовное право. часть общая. Том. I. II. 2001およびН.С. Таганцев, Русское уголовное право. часть общая. Том. 1, 2. 1994がある。

また、ザゴルドニコフによるタガンツエフの伝記・ニコライ・ステパノビッチ・タガンツエフ(Н.И. Загородников Николай Степанович ТАГАНЦЕВ. 1994)も公刊された。その紹介については、拙稿「刑法学と人間」(『法経論叢』(三重大)第14巻1号 1996年)、「刑法学と人間(2)」(『法経論叢』(三重大)第15巻1号 1997年)、「刑法学と人間(3)」(『法経論叢』(三重大)第15巻2号 1998年)参照。

コーニ (А.Ф.Кони(1844.1.29-1927.9.17))

「優れた裁判官、検察官および政治家。

1844年1月29日、ペテルブルクで有名な作家であり、劇作家、美しいボードビルの著者Ф. А.コーニの家庭に生まれた。10歳まで家で教育を受け、ついで聖アンナ教会付属ドイツ学校とペテルブルクギムナジウムで学んだ。17歳になって、ペテルブルク物理数学学部に入學した(アカデミー会員ソモフは、入学試験での若者の解答に感激した)。1861年秋の学生騒動によって大学が閉鎖された。1862年にコーニは、モスクワ大学法学部に入學し、法学士の称号を得て1865年に卒業した。この時期から法律の領域で彼の献身的な活動が始まった。

若き法律家の最初の時期は、国家検査院、ついで幕僚本部(1865年)での下級役人であった。数ヶ月間、ペテルブルク司法局書記補やモスクワ司法局検察官書記として勤務した。スムスキー地区裁判所検察官補佐(1867年)、ついでハリコフ地区裁判所検察官補佐という普通の職務は、職階によってその地位が上がっていった。1864年の司法改革の導入に関連して社会のなかに共通の高揚した気分が彼の世界観に影響を与えた。コーニは、1864年の司法規約の最も情熱的で、誠実な支持者の一人となった。

1869年には、外国で司法大臣パーレニ伯爵と出会い、彼によい印象をもった。1870

年に、ペテルブルグ地方裁判所の次席検察官に任命された。その後、より責任ある地位、サマルスキー県検察官、カザンスキー、ペテルブルク（1871年から）地方裁判所の検察官を歴任した。1875年に司法省の副部門長、次いで1877年に部門長となり、1877年12月にはペレルブルク地方裁判所所長になった。市長官トレパフを射殺し、陪審員によって無罪とされた、有名なザスーリチ事件の訴訟で議長を務めた。1881年にコーニは、やむなく留任させられ、ペテルブルク高等裁判所民事部門長職に異動した。同時に1875-1883年には、勤務の合間に、帝国法律学校で刑事訴訟法を教えた。

1885年にコーニは、元老院の刑事破棄部主任検察官に任命され、1897年までこの職に留まった（1891-1892年には元老院議員であった）。このときの間に、さまざまな事件について600以上の拘禁を行い、検察官として多くの訴訟に関わった（シェルバトフ公とメシエルスキー事件、プラトポポフ次長事件など）。1888年に勅命により、皇帝の列車転覆原因を調査するためにハリコフに派遣された。1898-1907年と1917年の2月革命の後に1917年5月まで、国家評議会員であった。1910年1月に2等文官が授与された。1901-1917年にペテルブルクのアレクサンダー貴族学校で教えた。

責任ある職務や教師の仕事と同時に、学術論文や社会評論分野でも、多くの、有益な仕事を行った。論文や判例評釈についての印刷物が出版された。1888年にコーニは、「法廷弁論」を出版し、1917年10月革命までいくつかの出版を重ね、ソビエト政権でも再三出版された。1890年からコーニは、ハリコフ大学名誉刑法博士であり、1900年からペテルブルク科学アカデミー名誉アカデミー会員となった。多くの優れた文化人と芸術人、学者と政治家に授与される章が与えられた。これについて興味深い回想が残っている（5巻、1912-1929年）。

10月革命の後、学術教育活動に転じ、ペテルブルク大学で教え、1917-1926年に1000回以上の講義をおこなった。

以下の勲章が授与された。勲一等スタニスラフ勲章（1889年）、勲一等アンニ勲章（1895年）、勲二等ウラディミール勲章（1898年）、ベルロ オルラ（1906年）、アレクサンドル ネフスコワ勲章（1915年）。

1927年9月17日死去。アレクサンドル ネフスキー大修道院に埋葬され、のちに遺骨はペテルブルクにあるボルコワ墓地のリテラトウラスキーモスクに移された。」（250-252頁）

*コーニ『選集』（А.Ф.Кони,Избранные произведения.1956.1958.1959.1966）

**稲子恒夫「コーニとヴェーラ・ザスーリッチ事件」（名古屋大学『法政論集』第39号・1967年）参照。

ドリリイ（Д.А. Дриль(1846-1910)）

ドリリイは、人類学派的、より正しくいえば、いろいろと混ざり合った傾向の犯罪学者で

あった。彼は、ロシア犯罪学の創始者でもあった。彼は、学者であったばかりではなく、実務的な犯罪学者でもあった。彼の業績は、基本的に犯罪学の著作であった。『年少犯罪者』（第Ⅰ巻—1884年、第Ⅱ巻—1888年）、『犯罪と関連した精神生理学諸類型』（1899年）、『犯罪論と犯罪との闘争措置論』（1912年 死後出版）。

ドリリイは、ロンブローゾとは対照的に、犯罪を「より近い」原因と「より離れた」原因の結果とみなした。彼は、第一に「精神生理学的組織を傷つけたこと」、第二に「その影響下でより近い原因が作られた好ましくない外面的条件」を指摘した¹⁹⁾。

フォイツキー (И.Я. Фойницкий (1847.9.10-1913))

「著名な刑事法学者。1847年9月10日、モギリョフ州ゴメリスク生まれ。チェルニーゴフのギムナジウム、次いでモギリョフのギムナジウムで学ぶ。ペテルブルグ大学法学部に入学。卒業後（1868年）、教授資格取得準備のために大学に残った。1868-1871年に、神学校の刑法講座で講義を行った。1871年に「ロシア法における詐欺（比較一ドグマ研究）」というテーマで修士論文審査に合格し、専任の刑法助教授に選任され、外国に派遣された。ベルリン、ライプツヒ、ウイーン、パリで教授達の講義を聴いた。研究のためにドイツ、フランス、イギリスの拘禁施設を見学した。

1873年に、ロシアに帰国し、ペテルブルグ大学法学部に2つの新しい講座、刑法講座（行政の等級試験を受験する学生にとって通常の）と監獄学講座（法学部の全学生にとって専門的な）を開講した。彼は、ペテルブルグ大学での法律会の創設者の一人として、その規約草案を作成し、書記職や委員、会の刑法部門の次席や代表を度々歴任した。国際懲治会議（ペテルブルグとパリ）の実施にあたっての予備会議で彼の指導によって、彼が委員長を務めた委員会が設置された。1873-1876年には、法律学校に刑事手続法の講義、アレクサンドル貴族学校では法の百科全書学についての講義が行われた。

1876年には、司法大臣パレンの発議を採択し、元老院刑事控訴院の検事長代理職に就いた。

1881年に、提出された学位論文「西欧における流刑—その歴史的発展と現状」で刑法博士の称号を得、ペテルブルグ大学刑法講座教授となった。1896年に、名誉ある正教授の称号を得、1897年に法学部長となった。いくつかの主要な著作が出版された。『刑事手続法講座』（第1巻・1884年、第2巻・1897年）、『監獄学と関連した刑罰論』（1889年）、『刑法講座 各論 人身および財産侵害』（1890年）その他多数。いくつかの彼の著作は、外国語（ドイツ語、フランス語、英語）に翻訳された。刑罰の執行を明瞭に紹介する博物館、刑法に関する図書館、学生の授業のための施設を刑法の部門に構築した。

1889年から、国際刑法学会のメンバーとなった。ブリュッセル、ベルン、パリで開催された学会の大会に参加した。1895年に彼の指導によって、国際刑法学会ロシア支部が組織され、その支部長となった。

1913年死去」（478-480頁）。

ピオントコフスキー (А.А. Пионтковский(1862-1915))

P.アジノフとA.バジャノフは、ピオントコフスキーを評伝するなかで、「カザン大学教授、ピオントコフスキーは、有名な進歩的法律家の一人として、革命前ロシアにおいて周知の人である」*と書いた。その学風は、社会学派的傾向であった。1862年7月3(15)日に生まれた。中等教育は、オデッサ市リシエリフスキー中学校で受け、高等教育は、ノボロシイスキー大学(オデッサ市)の法学部で受けた。大学卒業後、弁護士となった。1889年からノボロシイスキー大学法学部刑法講座の教授付研究生(大学院生)になった。2年後、博士号試験に合格し、非常勤講師となった。1892年初頭から、2年半外国—ドイツとフランスに派遣された。1894年に『執行猶予または試験体系について』を公刊した。この業績によって、公開審査ののち、法学博士の学位を授与された。1895年3月から1898年まで、ヤロスラスキーデミドフスキー法学男子貴族学校(刑法および刑訴法講座)教授となった。1895年には、『刑法学、その対象、課題、内容と意味』を公刊した。

1899年1月からカザン大学法学部刑法および刑訴法講座教授に転出した。1900年に大著『仮釈放』、1908年に『ヨーロッパにおける死刑』を出版した。1913年には、刑法総論講義第1巻が公刊された。1915年12月25日(1916年1月7日)、54歳で死去した。死去の5年前からカザン大学法学部長の職にあった。

*Р.Ажимов,А.Бажанов,Пионтковский Андрей Антонович (1862-1915)-

Ученые записки.Том121 кн.7(Казанский ордена трудового красного знамени гос.ун.1961) стр.202.

なお、拙稿「現代ソビエト社会と法(8) —刑法学者の父と子」(『法律のひろば』第40巻5号)1987年および拙書『ペレストロイカと死刑論争』三一書房 1993年参照。

エシポフ (В.В.Есипов(1867-1912.12.21))

「法学者

1867年、トウベルスキー県で貴族の家に生まれた。金メダルと大理石板に名を刻むことという名誉をもって法律学校を卒業した(1888年)。1889年にパブルフスキー軍学校の試験に合格し、近衛兵少尉に任官した。予備役となった1890年には、ペテルブルク大学法学修士課程に合格し、まもなく「過去と現在における犯罪の概念」というテーマでの学位論文の公開審査にも合格した。1891年には、司法官試験に合格し、1892年に学位請求論文の公開審査に合格した。1893年には、ワルシャワ大学刑法および刑事裁判手続法講座教授となった。再三、法律的知識をより一層充実させるために、外国に出向いていった。研究目的によって、ベルリン、ライプツヒ、ハイデルブルク、ヘッセン、マールブルグおよびボン大学を訪問した。

長期にわたって、裁判所書記官や裁判官を務めた。1905年に、「ポーランド帝国10県のためのワルシャワ統計委員会」委員長に選任された。彼の直接の指導のもと、ポーランド帝

国の経済・社会生活の問題についての委員会の17冊にわたる成果が準備され、刊行された。エシポフは、大学教授として研究・教育活動に従事しながら、1908年に「ワルシャワ日記」を編集し、出版した。国際統計研究所、国際刑事法学者連盟、ワルシャワ大学付属軍事史、東洋学、歴史、哲学と法の団体構成員となった。法律、経済、歴史および政治問題に関して60以上の業績を公表した。『1903年刑法典、その性格と内容』（1903年）、『ロシアにおける革命。一般的概説』（1907年）、『道徳と法：キリスト教倫理、現代美学と刑法』（1907年）、『ロシアにおける生活と法。一般的概説』（1908年）、『犯罪と芸術』など。

1912年12月21日死去」（183－184頁）。

ゲルネット (М.Н.Гернет(1874.7.12-1953.1.16))

「優れた法学者、歴史家、刑法分野における偉大な専門家

1874年7月12日、シンビルスキー県アルダツフ市で生まれた。そこは彼の父親がカラカゾフ事件に関与した罪で、政治的流刑に服した場所であった。1887年にシンビルスキーのギムナジウムに入学し、1893年に卒業した。この年にモスクワ大学法学部に入学し、勉強を続けた。学生による革命運動に参加した。1897年に大学を卒業し、「刑事責任についての青年期の影響」という仕事で金メダルが授与された。教授資格取得の準備のために刑法講座に残った。1897年に「法律新聞」紙上に最初の論文「弁護士倫理の諸問題」を発表した。

1902年に修士資格試験を受験し、モスクワ大学法学部で講義をおこなった。1902－1904年にかけて、外国に行った。そこでは、法学教育を徹底して受け、ハイデルブルグ、パリやローマの図書館で仕事をし、ベルリンでリスト教授の講義を聴いた。イタリア、フランス、オーストリア、ドイツの監獄を見学し、刑事博物館を訪問した。研究の成果については、雑誌『法』のなかに論文として発表した。

1904－1911年には、モスクワ大学非常勤講師であった。刑法についての講義を行い、ゼミを指導し、法学部付属博物館を組織した。1906年には、修士論文「犯罪の社会的事実」（1905年に刊行）の公開審査を受けた。1905年革命の敗北ののち、他の学者とともに、死刑反対を熱心に訴えた。この問題に捧げられた論文集（ゲルネット、O.B.ガリダフスキー、И.Н.サーハロフ編集）が、1906年に刊行された。ゲルネットの論文「死刑」が、1913年に発表された。1909－1911年には、学生ゼミを指導し、「モスクワにおける子ども犯罪」という共同作業の準備に参加した。1912年には、彼の編集の下、その序文を添えて、『子ども犯罪者』という論文集が出版された。

1911年には、モスクワ大学の講師たちとともに、高等教育分野における政府の厳しい政策に対する抗議のしるしとして辞表を提出した。こののち、A.A.シャニャフスキー名称民族大学、高等女子講座、ならびにモスクワ、ハリコフ、ニジネヴォ ノヴォゴロドなどの町の人民大学で講義した。1911年に、サンクトペテルブルグ精神神経大学の刑法講座教授に選任さ

れた。彼の刑法論文集、犯罪との闘争論文集、刑事裁判手続きウスターフコンメンタールが出版された。

1919年に、モスクワ大学法学部に戻り、刑事社会学講座で講義した。同時に教師活動と研究者活動とともに犯罪学博物館を管理し、大学図書館を指導した。1919-1930年に、統計管理センター—初めにロシア共和国、次いでソ連邦—で働いた。そこでは、道德統計部門の責任者を務めた。青少年の社会—法的保護部門についての啓発人民委員部コンサルタントでもあった。これらの年に、彼の次のような著作が刊行された。『道德統計（刑事統計と自殺統計）』（1922年）、『ロシア国内および外国での子どもの社会的—法的保護』（1924年）、『監獄のなかで。監獄心理学概説』（1925年）、『外国およびソ連邦内の犯罪』（1931年）などである。1923年に、モスクワで拘禁者の調査が組織された。彼の編集になる資料集として、『モスクワの犯罪世界』（1924年）が出版された。1922-1928年には、雑誌『法と生活』の編者の一人となった。1923年にソ連邦内に最初の犯罪者人格と犯罪研究部門がゲルネットも参加して組織され、1925年に内務人民委員部付属国立犯罪研究所が設立され、彼が所長となった。

1930年代始め、ゲルネットは視力を失ったが、学術および教育活動を積極的に行ってきた。1936年6月29日、ソ連邦科学アカデミーは、学位論文審査なしに国家および法学博士の学位を彼に授与した。1936-1937年にゲルネットは、革命前刑事、軍事刑事および軍事仲裁刑事統計100年の資料集を編纂した。彼は、刑事政策研究所出版、大ソビエト百科などに数多くの興味深い論文を公表した。

1942-1948年に、ゲルネットはモスクワ大学法学部刑法講座教授であった。1941年には、彼の基本から積み上げた労作『ツァー監獄史』第1巻を、1946年にその第2巻を、1948年に第3巻を刊行した。

労働赤章という勲章が授与された（1944年）。1928年には、30年間の学術および教育活動について、「ロシア共和国功労活動家」という称号が与えられた。スターリン章受賞者となった（1947年、『ツァー監獄史』という論文集に対して）。

1953年1月16日死去」（120-122頁）。

*ゲルネット『選集』（М.Н.Гернет,Избранные произведения.1974）

**社会学派的傾向をもった、刑法学者として、ゲルネット、ゴゲリ、イサエフ、コーニ、リュブリンスキー、ポズネシェフ、ポリャンスキー、チャリノフ、チュビンスキーなどがあげられている。

(8) Н.А.Неклюдов.Уголовно-статистические этюды(1865)—С.С.Остроумов.Преступность и ее причины в дореволюционной России(1980) с.158-165.

(9) ウスチノフ「20世紀のわが国の犯罪学」В.Устинов(профессор Нижегородской академии МВД России доктор юридических наук, профессор),Некоторые итоги развития отечественной криминологии в XX веке.Уголовное право, 2001. № 1. С. 74-76. С.С.Остроумов.Преступность и ее причины в дореволюционной России(1980) с.165-174.